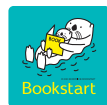


Bookstart Newsletter



2023
冬
No.79

ブックスタート・ニュースレター



新潟県長岡市

特集

読みきかせの「体験」を届けたい

～ コロナ禍を乗り越え、前に進むために ～

新型コロナウイルス感染症の流行が続く中、読みきかせの休止や実施機会の変更など、ブックスタートは大きな影響を受けています。「孤立しがちな親子に、少しでもブックスタートで楽しい時間を過ごしてほしい。でも、絵本を読みきかせることで、もしも感染が広がったら……」。活動の関係者は、こうしたもどかしい思いを抱えながらも、活動を少しずつ前に進めてきました。

コロナへの備えや知見が世の中に蓄積されてきた今、感染予防を施しながら読みきかせを再開する動きが広がってきました。保護者のニーズも確認されています。一方で、健診で実施できず会場を変更したため参加率が下がってしまったり、健診での絵本の配付は行っているものの、読みきかせの再開が難しい自治体もあります。

今回は、コロナ禍が3年を経た現在、自治体がどのような取り組みをしているのか、4つの事例をご紹介します。これらの事例を通して改めて浮かび上がったのは、「連携」の必要性と、「今、子どもたちのために何ができるのか」という活動の根幹に立ち返る視点でした。

※ニュースレターNo.71・73でもコロナ禍の事例をご紹介します

ケース1 兵庫県芦屋市

読みきかせを再開 感染状況を見極め判断

4か月児健診でブックスタートを実施している芦屋市では、健診の受付で絵本を手渡し、待ち時間に絵本の読みきかせを行っていました。コロナ流行後は読みきかせを休止。代わりに活動の趣旨や絵本を紹介した親子のふれあいの楽しさについて、保健師から保護者により丁寧な説明を行うようにしました。休止中も読みきかせを担当する図書館と定期的に連絡を取り合い、再開のタイミングを見計らっていました。

2022年春、感染拡大の波が収まりワクチン接種が進んだため、4月から読みきかせを再開することにしました。再開にあたっては、市の感染対策の規定と照らし合わせながら実施方法を図書館と協議したほか、NPOブックスタート発行／小児科医・榊原洋一監修「感



絵本に手を伸ばして図書館員の読みきかせを楽しむ赤ちゃん（芦屋市提供）
※写真撮影のため実際より近づいて読んでいます

染症対策ガイドライン」も参考にしました。
コロナ禍での健診は、親子の滞在時間を短くしたり、入場制限を行ったり、一方通行にして人の動きを整えたりと、密を避ける工夫を行っています。そのため、読みきかせコーナーもその流れに組み込むかたちで設置。順番待ちの親子がいる時には、1冊すべてではなく数ページで読みきかせを切り上げるなど、状況に合わせて対応しています。

保健師は再開当初、感染を気にする保護者の動向を気にしていましたが、コロナ前に比べて多くの親子が読みきかせを受けており、再開してよかったです。



「感染症対策ガイドライン」
当NPOウェブサイトからダウンロードできます

ケース2

新潟県長岡市

密を回避して絵本を紹介

出生数約1600人（2020年）の長岡市では、ブックスタートの実施機会となる5〜7か月児赤ちゃん相談も複数の会場で行われます。最も規模の大きい「さいわいプラザ」は、午前と午後、それぞれ約50組の親子が訪れる場所です。

コロナ前は、ボランティアが4冊の絵本を読みかせた後、1冊選ん

でもらって渡していたため、親子ひと組あたり15分ほどの時間をかけていました。現在は、①ボランティアによる絵本のポイントの紹介、②親子が見本を手に取りながら絵本を選ぶ、③絵本をプレゼントする、というように、コーナーを3つに分け、親子が1か所に長くどまらないうにしています。*次ページ参照

ポイントの紹介は5分を目安とし、保護者が気になる絵本を数ページ読むなど、短い時間で済ませられるように工夫しています。さらに、選ぶのに時間がかからないよう、絵本の紹介資料を健診の受付で配付し、待ち時間に目を通してもらえるようにしています。

ブックスタートを受けた保護者からは「初めて見る絵本に我が子も興味津々でした。幼い頃に繰り返し読んだ絵本のことには私自身よく覚えています。ここでもらった絵本が、我が子の大切な記憶の1ページになればいいなと思います」との感想が寄せられました。活動の休止期間を経て参加するボランティアからも、「赤ちゃんに癒される」「元気をもらった」といった声が聞かれるなど、短時間でも充実したひとときになっています。

● 長岡市コロナ禍における
ブックスタートの流れ ●
(長岡市提供)

① 絵本の紹介



② 見本から親子が1冊選ぶ



③ 絵本をプレゼントする



ケース3
大分県日出町

メモリアル手形アートと
読みきかせで参加率アップ

日出町では、もともと4か月児健診でブックスタートを実施していました。しかし、コロナ禍で健診が個別受診となったため、現在は図書館で事業を行っています。

集団健診で実施していた時はほぼ100%だった参加率ですが、2022年度に入ってから50%を切る状態が続いていました。図書館員は何か対策ができないかと考え、連携機関である子育て支援課に相談。

参加率を上げるために、絵本に関心のない人にも来てもらえるような工夫ができないだろうかというアイデアを出しました。

日出町では、社会福祉協議会（以下、社協）が子育て支援施設「HUGくみ」を運営しています。「HUGくみのイベントと、ブックスタートとのコラボ企画を行えば、参加率が上がるかもしれない」。そう考えた担当

者は、子育て世代へのアピールや図書館での情報発信も兼ねて、出張イベントしてもらえないかと社協に相談しました。

この相談を快く引き受けた社協は、どんなイベントなら親子に参加してもらえるか、スタッフからアイデアを出してもらい「ブックスタート×メモリアル手形アート」を行うことになったのです。

イベント当日、まずはブックスタートの時間です。アクリル板を設置するなど感染対策を徹底しながらも、親子が楽しめる雰囲気大切に絵本を読みます。その後、親子は「メモリアル手形ア



赤ちゃんの手形・足形を加工した巾着袋は成長の記念になります（日出町提供）



ト」に参加。赤ちゃんの手形や足形を押して、巾着袋づくりを楽しみました。

「図書館に来るよい機会になりました」「長男の時にもあった絵本をボロボロになっても読んでいます。今回も参加できてよかったです」など、参加率が上がっただけでなく、保護者からはイベントやブックスタートについて好意的な感想が多数寄せられました。図書館では、今後も親子のニーズを考えながら柔軟にコラボ企画を続けていくそうです。

ケース4
滋賀県長浜市

読みきかせ再開に向けて
図書館員による
保健師向け職員研修を実施

長浜市では4か月児健診でブックスタートを実施しています。これまで、事務局である図書館と健康推進課が連携し、事業を継続してきました。また、ボランティアの協力も得て、親子ひと組ずつに丁寧に読みきかせをして絵本を手渡していました。

しかし、コロナ禍以降は健診の時間短縮が必要となり、読みきかせは



コロナ前の様子（2012年撮影）

休止。図書館員・ボランティアがセット組みをしたブックスタート・パックを、保健師が親子に手渡しています。

「この状況下でも、もう少し良いかたちで実施できないだろうか？」。親子に声をかけつつ、しかしパックを手渡すだけの現状に、図書館員・保健師双方にそんな思いが募ってきました。そこで企画したのが図書館員による保健師向け出前講座「ブックスタートについて学ぶ職員研修」です。パックを手渡す保健師に事業を

より深く理解してもらうことで、現状の打開と充実を図るのが目的です。講座には健康推進課をはじめ、健康づくりに関する施策立案を担当する健康企画課や、コロナウイルスワクチン接種推進室の職員も参加。約60名が会場やオンラインで受講しました。

講座では、事業の概要だけでなく、長浜市での立ち上げの経緯や、図書館が子育て支援を行う意味についても伝えました。また、「タテ割り」と言われる行政の中で、ブックスタートではいかに健康推進課と図書館が「ヨコ連携」してきたのか、コロナ禍で孤立しがちな人が増えている今だからこそ、市民に対して行政の「顔」が見える関係を築くことが大切であり、どうかして読みきかせの「体験」を届けたいと考えていることも伝えました。

参加した保健師からは、読みきかせに関する質問だけでなく「パックを渡すと保護者にとっても喜ばれます。準備しているのは図書館とボランティアさんなのに、私たちがばかりが感謝されて

VOICE



長浜市立長浜図書館 館長
下司 満里子 さん

※事業立ち上げ当時の担当者。今回の職員研修で講師を務める。

18年ぶりに保健師と向き合って

ブックスタートの立ち上げの際、健康推進課の皆さんの前で、事業の意義や、赤ちゃんと周りの大人は絵本を介してどんなに幸せな時間が持てるのかについてお話するとともに、両課それぞれの立ち位置や大切にしていることについて意見交換をした記憶があります。その後も担当者どうしでの話し合いは重ねていましたが、今回の講座は事業立ち上げ以来、18年ぶりに保健師に話をする機会となりました。人との接触を控えなくてはならないという、人間にとって一番の危機的状況に立ち向かい、今後の様々な事業をどう工夫していこうかという局面で、このような場を持つことができたわけです。

この事業を始めてから今も変わらず根幹にあるのは「今、目の前の子どもたちにできることは何か」という視点です。今後も、部署の垣根を越えて、共に長浜市の子どもの健全な心と体の成長を願う機関として、今できることがないか一緒に考えていきたいと思っています。

● おわりに

感染状況を注視しながら密を避けることは、引き続き必要です。しかし、人との接触を避け続けるだけが、本当に「安心安全な場」をつくることになるのでしょうか。恐れ過ぎず、人と人のつながりをブックスタートで再び紡ぐことを考える段階に入ってきているように思います。



追悼 松居 直

松居 直がブックスタートに見出したもの

2022年11月2日、当NPO会長であった松居直が96歳で永眠いたしました。福音館書店相談役でもあった松居は、長年にわたり数多くのロングセラー絵本を生み出してきた児童書の編集者でした。2000年に「子ども読書年推進会議」の副代表を務める中でイギリスで行われていたブックスタートと出合ってから、日本の活動の理念を深め、地域の活動を支える仕組みと組織づくりに尽力しました。イギリスの取り組みに「これはすごい発想だ!」と驚き、その後22年間にわたり活動を支持し続けてきた松居は、ブックスタートの何に魅力を感じ、希望を見いだしていたのでしょうか。2008年に行われた会議の記録から、今もなお私たちに語りかける言葉をまとめました。

本がお役に立つ

私はこれまで「読者が喜んでくださる本を作る」という編集方針で絵本作ってきました。ですから絵本は、読者の手に渡らなければ意味がないのです。ブックスタートではすべての赤ちゃんに絵本を手渡し、さらにそれを赤ちゃんとお母さんやお父さんを結びつけるために使っていただける、と。これは私にとつては夢のような話なのです。

ブックスタートによって「本がお役に立つ、役に立てていただける」というふうに私は感じました。

シェアブックスとは、共に生きる喜びを分かち合うこと

イギリスの活動を知った時、「イギリス人の意識の中には、いつも『社会があるんじゃないか』と感じました。私は、イギリスという国は長い歴史の中で人々が少しずつ社会を変えながら作られてきたと思っています。いまイギリスは多民族・多文化社会です。そんな社会状況だったからこそ、ブックスタートも生まれたのではないかと思ったのです。

異なる文化背景や言葉をもつ人々とも仲良くやっていくこと、これは日本

でもますます大きな課題となるでしょう。外国から人に来ていただかないと社会活動が立ち行かず、伝統さえ継承できなくなる。今後、多くの外国の人たちが家族とともに日本で暮らすようになる中で、日本語はどういうふうになつていくのか。日本で暮らす外国の人やその子どもたちの母語や日本語を彼らに伝えるには、どういうふうにしたらいいいのか。このことは子どもの本を出版している人間にとつても、将来の課題のひとつでした。

ブックスタートというと、どうしてもひとつの家庭や地域の中でのことを考えますね。それをこれからは、さらに地球規模に視野を広げていくことが大切ではないでしょうか。

1冊の絵本を赤ちゃんの目の前でひらくと、そこには情愛のこもった言葉が自然とあふれ出します。本を中心に親子が気持ちを通い合うこと、イギリスではそれを「シェアブックス」という言葉で表現しているそうです。その言葉に出合った時に、イギリスではもしかしたら「シェア」という言葉が、親と子どもの間だけに留まらずに「みんな」で「社会で」という共生の感覚までも含んでいるように感じたのです。本というのは言葉の世界であり、

言葉は人に喜びを与えます。シェアブックスとは「共に生きる喜びを分かち合う」ということなのではないでしょうか。

ブックスタートが「新しい社会」をつくる

このことは、今の日本の地域社会にもあてはまるように思います。

保健センターや図書館の方が、ブックスタートをひとつの場として親子とつながりを持ちますね。本を渡すだけでなく、言葉を交わして話をすれば、そこに人間関係ができる。別の家族もそこでつながったり、その親子が図書館に来ればみんながニコニコするわけです。

これは1回、2回のイベントではありません。この目に見えない輪をコツコツと積み重ねていったところに「新しい社会」というものができるとは思いません。ブックスタートが生き生きと利用されれば、となり近所がなくなり崩れかけている地域社会が、再び活性化してくると思うのです。あと10年か、いや100年くらいかかるかもしれない。でも100年やれば歴史になりますからね。そのつもりでやれば、日本で世界最高のブックスタートができると思っています。

ブックスタートの哲学

学習院大学教授 秋田 喜代美

「バーミンガムに行って、英国のブックスタートをみてきてくださいますか？そして日本らしい活動を一緒に考えてください」

この言葉を松居直先生からいただいたのは、子ども読書年の2000年でした。東京大学に着任して間もない40代初めの研究者だった私の研究室をご訪問くださり、お目にかかったのが、先生とのご縁の始まりでした。数々のご著作を拝読し講演等を伺っていた私にとって、高名で尊敬する先生が、とても物腰低く穏やかで柔和な笑顔と慎み深い口調で、ブックスタートへの熱い期待をお話くださった時のことを、今もありありと覚えています。その日から、活動立ち上げメンバーの一人に加えていただくことになりました。

松居先生が語られた「この活動の成功は、絵本を手渡した赤ちゃんが大人になり、親になった時に、わが子にも絵本を読みたいと思うかどうかです」という言葉が私の胸に深く刻みこまれています。

絵本を分かち合うことが喜びをもたらし、親子の絆を育てること、それがひいては子どもの言葉の力や想像力

を育むという短期的視点しか持っていなかった当時の私は、赤ちゃん絵本の文化をブックスタート活動によって育てていくという長期的で社会文化的な視座を先生の言葉により与えていただきました。

20年、30年先を見通されたこの言葉が、長く読み継がれる良質の絵本を創り続けられてきたご経験に裏付けられたものだったことを今改めて感じます。その哲学は、子どもたちの笑顔、子どもを支える大人の笑顔と幸せ溢れる街づくり、その中心に絵本があるという、現在私が進める子ども子育てのコミュニティづくりの思想の原点です。

これからも私たちは先生の哲学や言葉を大切に、ブックスタート活動の輪を共に育んでいきたいと思えます。「活動を広げるのではなく、いいものは広がっていきます」とのお言葉に力を得て、時代は変わってもこの文化を絶やすことなく受け継ぎ、歩みを続けていきたいと願っています。

松居先生、天国から私たちの活動と、子どもたちとそれを支える人の喜びと幸せを、これからも見守っていてください。合掌



親愛なるアジャーン松居直

ThaiBBY 財団（国際児童図書評議会タイ支部）会長
ボンアノン・ニョムカ・ホリカワ

松居直さんはタイでもとても有名な方です。タイ語では敬愛の意を込めて「アジャーン松居」（松居先生）と呼ばれています。

先生との出会いは1993年にさかのぼります。タイの大手出版社であるアマリン社の主催による「子どもの本づくり」をテーマにした講演会に先生が招かれ、通訳を私が務めたことがきっかけです。タイでは児童書がまだほとんど出版されていなかった当時、絵本づくりに関心を持つ作家や画家にご講演くださいました。

私は我が子の子育てを通して日本の絵本を楽しく読んだ経験から、どうすればタイの子どもたちにも絵本を届けられるかをいつも考えていました。ですから高校時代の友人でもあるアマリン社の創業者から、児童書編集チームの立ち上げに参画して欲しいと言われた時、迷うことなくその申し出を受けたのです。私たちは松居先生の絵本づくりの教えだけをたよりに、1冊1冊、絵本をつくり始めました。

私は『絵本の現在 子どもの未来』*と、福音館書店発行のリーフレット『絵本の与えかた』、そして1993年

の講演内容をタイ語に翻訳し、編集して小さなブックレットにまとめました。それはタイの保護者と教師が「子どもと絵本を読む文化」について知る手引きとなり、のちにタイ教育省によって増刷され、無料で配布されるようになったものです。

その後も先生との交流は続き、2001年4月に東京の松居先生を訪ねた際には、イギリスのブックスタートを視察し、まさに日本の活動を立ち上げようとしていたNPOブックスタートの佐藤いづみさんを紹介されました。タイでもブックスタートを始めようと考えた私たちは、2003年4月にイギリスの活動発案者であるウェンディ・ワークリングさんの講演会を開催、7月に活動を開始、11月には日本を視察し、実際の取り組みの現場から多くを学んだのです。タイのブックスタートは、いまでも継続しています。

松居先生はそのご生涯を通して、タイの児童書界に多大な貢献をしてくださいました。先生のあたたかいご指導に感謝し、安らかなお眠りを心よりお祈りいたします。



左隣がボンアノンさん
1999年 バンコク子ども図書館にて

*松居直 著、日本エディタースクール出版部、1992年

『ゆかいなさんぽ』を語る楽しみ

おはなしポケットの会代表 足立茂美

11月初旬の新聞紙上で、松居直さんが死去されたことを知りました。その記事を読みながらいろいろな思いが胸中を去来しました。

2005年10月12日に鳥取県米子市で“ブックスタート地域大会inとっとり”が開催された時、松居さんはNPOブックスタートの理事長として、記念講演をしてくださいました。その前日、実行委員長だった私は、米子空港まで松居ご夫妻をお迎えに行きました。車をゆっくり走らせながら「水木しげるロード」をご案内し、餅がお好きだということなので、米子の餅専門店にお連れしました。お二人で餅の服やネクタイや生地を手に取り、仲睦まじく言葉を交わされていた様子を、今も懐かしく思い出します。

松居さんは空港でお会いした時から終始物静かで、車中、むやみに話しかけるのも悪いような気がしましたが、思いきって1965年に福音館書店の「月刊誌 こどものとも 116号」として発刊された『ゆかいなさんぽ』のことを話題にしました。大好きな絵本で、幼い娘とずいぶん楽しんだこと、今はおはなし会などで覚えて語ってい



『ゆかいなさんぽ』
土方久功 作・絵／福音館書店

ることをお伝えすると、松居さんの顔がさっとほころんで「あの絵本は私が編集にあたった絵本で、今でも傑作中の傑作だと思っています」とおっしゃり、話が弾みました。以来『ゆかいなさんぽ』を語ったり読んだりするたびに、あの時の笑顔を思い出し、松居さんも一緒に楽しんでくださっているような気持ちになります。

「こどものとも」といえば、かれこれ55年余り購読し続けています。毎月「こどものとも」を手にするたびに、創刊者の松居さんの、絵本というものに込められた思いも一緒に届いたような気がして、じっくりと読みこんだり絵を眺めたりします。私の楽しみのひとつです。

松居さんに教えていただいた〈絵本を介して親子が互いに喜びを分かち合うことの大切さ〉を、これから多くの方に伝えていきたいと思います。



活動の立ち上げにあたり書き記した言葉を、あらめてご紹介します。

ブックスタートに寄せて

松居 直

「ブックスタート」は絵本を普及する活動ではありません。言葉の世界そのものである絵本に、「お幸せに！」という想いと言葉を添えて手渡し、共に生きることを願うものです。

イギリスで始められた「ブックスタート」という活動を初めて聞いた時、そこに社会における人間尊重のとてもあたたかい思いを感じました。そして私の中でも「家庭に絵本を届ける」ということが、すばらしいと思いました。家庭での生活の中で、子どもたちの気持ちに響く、あたたかくて豊かな言葉を語りかけることがとても大切だと思ったのです。絵本をいっしょにひらく時間は、子どもにも親にも大きな喜びをもたらします。私はそこにブックスタートの本質があるように思いました。

そしてもうひとつ、私がブックスタートの鍵だと思っていることがあります。それは「お母さんの幸せ」です。「赤ちゃんの幸せ」はみんなの願いですが、それは「お母さんの幸せ」にかかっているのです。お母さんが幸せでなくて、赤ちゃんが幸せになれるはずはないのです。お母さんの声は、子どもにとって本当にもものすごい力をもっています。例えば、絵本をひらいて語りかけるだけでも、赤ちゃんはとてもうれしいのです。そして自分の声を聞いた赤ちゃんが飲む姿を見れば、お母さん自身も飲ばれます。つまり赤ちゃんが絵本をひらくことは、それだけでお母さんを幸せにすることができるとは、それだけです。

そこで何よりも大切なのは、まず家庭でのお父さんによる支えであり、そして地域社会の支えです。ブックスタートでは、絵本を手渡しながら「あなたのことを応援していますよ」「お手伝いしますよ」と語りかける地域の人がいるのです。地域の保健センターや図書館といった公的機関が、あたたかい言葉を交わし合っていて人々がつながる場所と機会を提供することも、新しい地域社会を作るという点で、とても意味のあることだと思います。そういう環境があれば、本当に安心して子どもを育てることができるでしょう。

赤ちゃんのいる家庭に絵本を届け、子育て中の方たちを支えることで、子どもたちの人生の出発点に、喜びを共にする、という経験を贈ること。ブックスタートは、これからの時代においても、引き続きそのことに力を尽くさなくてはならないと思っています。

子ども・社会を考えるシリーズ

新刊

のお知らせ

- A5 サイズ
- ソフトカバー

NEW



子ども・えほん・うたのこと

中川ひろたか（シンガーソングライター）



「ひとはどうやって人間になっていくんだろう？」

人間の原点でもある「子ども」に出会いたいと、保育の世界に飛び込んだ男子大学生。まだ保育は女性の仕事と見なされていた時代でした。彼こそが、現代のわらべうたと称されるほど愛される歌や、読み手の心に寄り添い、ときに問いかける絵本を作り上げてきた、中川ひろたかさんです。自由に育った子ども時代、保育の日々で感じた「子どもと絵本と歌」のこと、言葉への考察……。その創作の背景を探ります。絵本や歌の制作秘話も盛りだくさん！

● 本体 770 円（税込） ● 48 ページ ● 2023 年 1 月発行

地域で母子を支える～周産期医療の現場から～

三石知左子（小児科医）



不安定な収入、望まない妊娠、家庭内の問題など、様々な要因から支援を必要とする妊産婦が増加する中、新型コロナウイルス感染症の拡大がその流れに拍車をかけました。周産期医療の最前線で向き合った家族の事例をもとに社会課題を明らかにします。生まれ育った環境に関わらず、すべての子どもたちが健やかに育つために何ができるのか。親子のふれあいにおいて、絵本はどのような役割を果たすのか。医療現場・地域・自治体の横連携で、母子を中心とした全人的ケアの一翼を担う小児科医からの提言です。

● 本体 770 円（税込） ● 36 ページ ● 2023 年 1 月発行



NEW

既刊

● 赤ちゃん・絵本・ことば 谷川俊太郎（詩人）
本体 660 円（税込）／ 56 ページ／ 2015 年 1 月発行

● 赤ちゃん～ゆりかごの中の科学者～ 榎原洋一（小児科医）
本体 550 円（税込）／ 52 ページ／ 2016 年 3 月発行

● 社会で子どもをはぐくむ 武田信子（臨床心理士）
本体 550 円（税込）／ 44 ページ／ 2017 年 3 月発行

● すべての赤ちゃんに絵本を ウェンディ・クーリング（ブックスタート発案者）
本体 660 円（税込）／ 96 ページ／ 2019 年 1 月発行

● 絵本はコミュニケーションツール スギヤマカナヨ（絵本作家）
本体 660 円（税込）／ 38 ページ／ 2020 年 2 月発行

● 人間の育児スタイルは共同養育 明和政子（比較認知発達科学者）
本体 660 円（税込）／ 54 ページ／ 2020 年 2 月発行

● 父の話をしましょうか～加古さんと松居さん～
鈴木万里（加古里子 長女） 小風さち（松居直 長女）
本体 660 円（税込）／ 54 ページ／ 2020 年 3 月発行

※ 電子版もあります（お求めはネット書店まで）

ご注文はこちら



ことのは

NPO ブックスタートのスタッフが出合った言葉

動きまわることのできる文字は、世界に満ちる無垢のやわらかい「ことば」になっている。

『異なり記念日』（齋藤陽道 著・医学書院）より

齋藤さんに促された妻のまなみさんが、お子さんに向け、指文字を生きもののように動かして紡ぎ出したのは、臨場感あふれる手の物語。デフファミリーで育ったまなみさんは、幼い頃布団の中で、母親が指文字をなめらかに移り変わらせる情景を見ながら眠りにつくこともあったそうです。三次元空間で生まれる「指文字」は、紙の「文字」とはまったくの別物。手話教室に通い始めた私ですが、指文字はつなげて単語にするもののだと思ひこんでいました。手の物語を想像し、手話を学ぶのがより楽しみになりました。

Information

ブックスタート
全国研修会 2022
見逃し配信中！



2/28
まで